# 水源地域活性化調査「五ヶ瀬川流域」の取り組み

# 学びのツーリズム形成を目指して

報告書

平成 22 年 3 月

国土交通省 土地・水資源局

水資源部　水源地域対策課

## はじめに

水資源開発は、ダムの建設等により上流の水源地域に一方的な不利益や不公平感を生じることから、水源地域住民の理解を得ることが不可欠です。このため、下流受益地域が水源地域への理解と協力を進め、ダム貯水池の水質保全・水源林の整備などの水源地域対策を流域一体となって共に行うことが重要となっています。

近年、上下流における流域活動に関心の高い水源地域と下流地域とのそれぞれの行政や行動力のある非営利活動組織（いわゆるNPO）などが互いに連携することについて模索が始まっていますが、一部の住民等の活動に留まっています。今後、流域全体が一体となった水源地域の保全・活性化への取り組みを促進していくことが重要な課題となっています。本調査は、このような状況の中で、上下流の流域活動に関心の高い住民等のみではなく流域活動に関心の高くない層の住民等も流域活動に参加し、上下流全体が一体となり水源地域の保全・活性化を促進するための仕組みづくりについて調査・検討を行ったものです。

水源地域対策課

もくじ

調査概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

第１章　本業務の背景と目的 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

第２章　五ヶ瀬川流域の取り組み ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

第３章　新たな活性化のための「学びのツーリズム」の企画 ・・・・・・・12

第４章　学びのツーリズムの推進 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17

第５章　今後の展開 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43

資料編　 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47

◎「いっちゃが宮崎楠並木朝市」出店報告書(宮崎大学)
◎鞍岡波帰調査チーム(東海大学)
◎モニタースキーツアー報告書（宮崎大学)
◎五ヶ瀬最終報告(宮崎大学)

# 調査概要

「水源地域活性化調査」（流域タイプ）は、水源地域を活性化するために、水源地域だけでなく下流地域や受益地域も一体となって取り組んでいく仕組みを検討するための調査である。五ヶ瀬川流域の取り組みの概況は、以下の通りである。

## １．調査の目的

流域全体が一体となった水源地域の保全・活性化への取り組みを促進していくことが重要な課題となっている中で、五ヶ瀬川流域を軸として、水源地域（五ヶ瀬町）が進めてきた地域づくりについて、下流側の民間企業や団体等との連携を発展させていくための関係づくりを促進した。本調査の目的を果たし定着させていくためには、流域という広い地域を対象としていることから、概ね３カ年を一つのサイクルと捉えている。平成19年度から取り組んだ本調査は、今年度が最終年度である。

## ２．調査の経過

宮崎県五ヶ瀬町は、五ヶ瀬川の源流であると共に阿蘇山の景観を持つ地域である。五ヶ瀬町は、長年、水源地域の町として環境に配慮した地域づくりや地域資源を活かした産業振興を模索してきた。しかし、活動の中心となっていた人材が高齢化することにより、活力が低下したり活動が消滅したりするなどしていた。

### ■源流の町としての意識喚起

初年度（平成19年度）は、五ヶ瀬町の主催による「源流シンポジウム」の議論を通して、あらためて住民の水源地域のまちづくりに対する意識喚起を図った。この間に、五ヶ瀬町のリーダー的人材が集まり、今後の五ヶ瀬町の地域活性化を進めるためには、何をすべきかの議論を繰り返した。五ヶ瀬町には、九州発祥の地といわれる古い時代の地層を見に来る活動や、環境を活かした自然学校の推進、農家民宿グループによる都市住民の農村体験などが行われている。これまでは個々の取り組みでしたが、五ヶ瀬町全体として「学び」をテーマとしたツーリズムをまとめ、農山村観光による振興を模索していくこととした。また、地理的に九州の中央に位置しており、宮崎県庁まで３時間半、熊本市内まで１時間半、九州の中核である福岡市内までも２時間半ほどである。このような関係から、地域活性化のマーケットは、熊本市や福岡市など広く九州全体をターゲ

ットにしていくことが必要であると考えた。

**■九州中央部の地理特性を生かした五ヶ瀬川流域一体化に向けての戦略の構築**

五ヶ瀬町内では、以前より都市との交流による活性化の取り組みに熱心であった。冷涼な環境を活かした農産物も多く、それらによる都市農山村の交流や農家民泊による交流人口の拡大に努めてきた。特に農家民宿で都市部の若者を受け入れたり、充実した町営スポーツ施設を用いてスポーツ合宿を受け入れたりする実績を持っている。さらに、自然環境を活かした自然学校もＮＰＯによって運営されている。これらの実績から、五ヶ瀬町が持つ“地域の教育力”を活かして「学び」をテーマに豊かな自然と歴史を活かしたツーリズムを形成することで、九州各地からの来訪者を増大させ地域を活性化させていくこととした。この具体化に当たっては、２つの段階を経ることとした。最初は、五ヶ瀬町住民が、地域づくりを研究している大学ゼミの学生の協力を得て「学び」をテーマとしたツーリズムの考え方を実践的に整理し、実際のプログラムの進め方を模索する。その経験を踏まえ、次の段階で一般の人々を対象とした「学びのツーリズム」のプログラムを構築していくこととした。

**■学びのツーリズムのための学生企画提案の試行**

宮崎大学及び長崎県立大学の地域づくりをテーマとする研究室の協力を得て、平成 20 年９月に五ヶ瀬町で合宿を開催した。プログラムは、大きく３つの段階がある。最初は、学生たちが五ヶ瀬町の集落に入り込み、地域住民から歴史や暮らし、なりわいなどの話を聞くことにより、地域理解を深めるプログラムを行った。続いて、聞き取りを通じて学生たちから地域を活性化させていくための社会起業アイディアを五ヶ瀬町住民に提案する場をつくった。最後に、後日、五ヶ瀬町民と学生が共同で、これらのアイディアを具体化するプロジェクトを行った。

このような３つの段階のプログラムにより、学生と五ヶ瀬町住民との間に継続的なコミュニケーションが生まれ、相互の往来が生じた。また、学生たちの斬新なアイディアを五ヶ瀬町住民も参加して具体化する活動を通じて、物販や宿泊等の経済的活性化だけでなく、心の活性化とも言えるような住民の活力創出にも繋がった。

**■「九州中央地域づくり研究所（仮称）」の発足**

五ヶ瀬町住民が学生と共に活動を行った結果、単に経済的活性化にとどまらず、参加した住民の中に新たな地域づくりを盛り上げようとする機運が醸成された。そして、学びのツーリズムを推進するためには、五ヶ瀬町に推進組織が必要との認識に至り、五ヶ瀬町役場が中心となって「九州中央地域づくり研究所（仮称）」を発足させていくことを議論し始めた。平成 21 年度には、研究所が中心となって学びのツーリズムの具体化に向けた体制の整備やプログラムの構築を図っていくこととした。

**■新たな人材育成の場の創出**

地域づくりを研究する大学ゼミは九州の様々な大学にある。しかし、これまで、これらの学生たちが大学を越えて一堂に会し、フィールドワークを行いながら学びを深める機会はなかった。今回の試行によって、学生たちは、他大学との繋がりができただけでなく、異なるゼミの研究分野の視点で地域づくりを学ぶ機会となった。また、学生たちが地域住民と共に行った試行の結果は関係者の口コミで他の大学にも広がっている。

**■企業等のＣＳＲの促進**

五ヶ瀬町が学生たちの人材育成を推進したことについて、さまざまな機会に活動報告を行ったところ、地元だけでなく九州管内の企業や経済団体等の関心を喚起することにつながった。そして、今後、学びのツーリズムの推進に当たって、これらの企業や経済団体から支援の申し出を受けることが出来た。

## ３．学びのツーリズムの推進

平成 21 年度は、2 カ年の準備期間を経て、平成 22 年度以降の「学びのツーリズム」の自立化に向けて仕組みの構築を目指した。

**■「学びのツーリズム」の自立化と持続化に向けた課題**

自立化と持続化に向けた課題は、以下のようなものがあげられる。

- 山人の地域経営センスを磨くことが必要
- 九州を視野に活躍できる人材育成の場が必要
- 山の活力を再生するには、若者の力と、その力を継続的に取り込む場が必要
- 人材育成を社会的な仕組みとするには、資金確保や専門家の力が必要

**■自立的・持続的な「学びのツーリズム」の構築**

地域住民が守り育んだ地域資源を、若者の社会的起業力によって新たな可能性を拓くことを目標に、自立的・持続的な「学びのツーリズム」の構築を進めていくこととした。

**■学生リーグ 2009　カリキュラム**

平成 20 年度の経験を活かし、平成 21 年度のカリキュラムを再構成した。

- 前年度報告会
- ３大学参加の合同研修会
- フィールドワーク
- フィールドワークのとりまとめ
- 五ヶ瀬町民対象に「報告会」
- 社会起業アイディアの試行
  - ✓ 宮崎市内の商店街でのプロモーション活動（宮崎大学）

- ✓ 五ヶ瀬スキー場の利用実態調査（東海大学）
- ✓ 大学にて募集した学生たちによるスキーツアー(宮崎大学)
- ✓ 五ヶ瀬町商工会で開発した商品サンプルを学生たちがテスト・モニター(宮崎大学)

## ４．今後の展開

3 つの大学の参加を得て進めた「学びのツーリズム」の 1 年間の活動は、平成 22 年度以降の継続が見込まれることとなった。

### ■これまでの取り組みの効果

- ➢ 学生たちがフィールドワークから見つけ出した地域の課題は、学生の言葉で住民に直接、問題提起し続けられている。
- ➢ 宮崎大学・長崎県立大学・東海大学熊本キャンパスの教員及び学生が、研究活動として頻繁に五ヶ瀬町に訪れるようになり、各集落でのフィールド活動を継続している。
- ➢ 各地区の実態は、まだまだ課題が多いものの、学生たちとの交流を繰り返す中で、徐々に受け入れの中で意識の変化が生まれている。
- ➢ 各集落（地区）の住民も、学生との交流により地域づくりに対する積極的な姿勢が醸成されつつある。
- ➢ 各集落の住民との交流から一歩進み、協力しながら地域振興を促進する活動へと深化しつつある。
- ➢ 平成 20 年度は、まずやってみた。平成 21 年度は、継続の体制が見えてきた。平成 22 年度以降は、さらに、各集落の住民が、自らの役割を認識できるように活動を深めたい。

### ■今後の展開

今後の展開について、動きが見えつつあるものを掲載する。

- ➢ 平成 22 年度も「学生リーグ」を五ヶ瀬町単独予算として確保し、継続発展の予定である。
- ➢ ４月には、３大学の先生たちに集まってもらい、平成 22 年度の活動を整理する。
- ➢ 策定作業中の「第５次五ヶ瀬町総合計画」において、学生リーグを絡めていく。
- ➢ 地域住民の協働を促進するためにも、次回の学生リーグでは、同じ日程で町民参加のシンポジウムを予定している。
- ➢ 九州中央地域づくり研究所の本格稼働による活動の継続化

# 第１章　本業務の背景と目的

## １．本業務の背景と目的

水源地域では、過疎化と高齢化の進展により水資源を育む水源地域の持続的な地域経営が困難となっており、ひいては良質な水資源の安定的な確保において様々な懸念がもたらされている。このため、流域の誰もが水源地域に経済的・文化的な関与を図ることを通じて、良質な水資源の安定的な確保への寄与を図ることが必要となっている。

水源地域対策においては、流域が一体となって取り組むことが必要である。水源地域や下流受益地域の自立的・自発的な行動が、良質な水資源の安定的な確保に結びつくと考えられる。

このような行動を誘発するには、まず、問題意識を持った人々の率先的な行動が必要となる。そして、活動が持続的に展開するためには、このような活動に必ずしも関心の高くない人々も関与していく仕組みが必要である。

本調査は、上下流活動に関心の高くない層の住民等も流域活動に参加し、上下流全体が一体となり水源地域活性化を促進する仕組みづくりの調査・検討を進めていくために必要なノウハウを集積し、他の流域でも応用できる手法として整理していくことを目的としている。

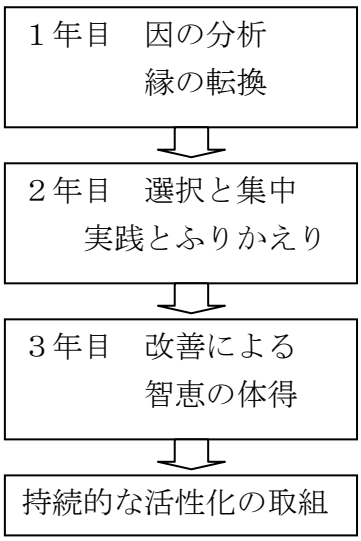
- ❖　流域全体を対象に、必ずしも流域活動に関心のない層の住民を巻き込んで、水源地域の自立的・持続的な活性化活動を実施するための仕組みづくりについての調査検討を行ったものである。

- ❖　本事業は、３カ年を掛けて進めてきた。

## ２．調査の進め方

本調査では、以下の考え方により調査の進め方について、概ね３カ年を見通して流域が一体となった水源地域活性化の仕組みを考えていくこととしており、今年度は、その最終年度に位置づけられる。

“３年１サイクル”




これは、流域というある程度広い地域を対象として本調査の目的を果たし定着させていくためには、概ね３カ年程度の期間を一つのサイクルと捉え、調査を進めることが必要と考えているためである。水源地域の活性化に資する「人材」に焦点を当てている本調査においては、最低限必要な期間と考えている。例えば、ハード事業でも、現状と課題の分析のための調査、構想の立案、計画の立案、実施設計と複数年の段階を経て、建設・供用に至る。水源地域活性化においても、担い手の現状と課題を分析し、当事者が水源地域を活性化していくための戦略を描き、はじめの一歩を踏み出すまでにそれ相応の時間が必要となる。

１年目は、当該流域が抱える課題（因の分析）を捉え、閉塞・暗転した状況から好転への転換点（場の改善）を見出すことが中心である。ステークホルダーによる戦略づくりを行い、関わる人々の一人ひとりに動機付けと目標設定を行う。そして、転換をもたらす人材を見出し、他地域から人材を巻き込むコーディネート（縁の転換）に多くの時間が費やす。

２年目は、「選択と集中」による実践に繋げていく。携わった人々が「実践とふりかえり」を繰り返すことにより、リアルタイムで戦略そのものが「深化」をし始める。

３年目は、改善による「持続化」である。この段階を踏むことにより、関わった人々にとって「知識」が「経験」を通じた「智恵」となる。関わった人々が体得した智恵は、本事業終了後も流域一体となった水源地域の自立的・持続的な活動を誘発する原動力となる。

## ３．調査対象流域

| 対象流域 | 主な対象地域 | 立地の特性 |
|---|---|---|
| 五ヶ瀬川流域 | 宮崎県<br>五ヶ瀬町周辺地域 | 五ヶ瀬川流域は、天孫降臨の歴史で有名な高千穂町を含む流域である。下流の延岡は繊維産業の大規模メーカーが立地している。五ヶ瀬町は、九州で唯一のスキー場を持ち、雄大な阿蘇の自然とも隣接する地域である。 |

# 第２章　五ヶ瀬川流域の取り組み

## １．五ヶ瀬町の地域づくりとその課題

五ヶ瀬町は､宮崎県の北西部に位置し熊本県とも接する人口 4,500 人ほどの町である。

地理的に、宮崎市まで車で３時間半かかるのに対し、熊本市までは約 1 時間半、福岡市まで２時間半で到達できる位置関係にある。このため、生活面では、宮崎市よりも熊本市や福岡市との関係が強くなっている。

五ヶ瀬町は、4 億 3 千万年前に九州で最初に海面から地表が顔を出したことから「九州発祥の地」と言われるように地質年代が古く、岩石も貴重なものが発掘されるなど地質関係者から着目されている。そして、祇園山など標高 1,000m を超える山地があり､全国最南端に位置する五ヶ瀬ハイランドスキー場がある。また、天孫降臨で知られる高千穂町や平家の落人伝説で知られる椎葉村など、日本の歴史にも深く関わる地域が取り巻いている。

五ヶ瀬町は、以前から地域づくりに熱心である。特に広々とした畑作地帯の桑野内地区は、どこからでも阿蘇連山が見渡せ、特に大きく美しい夕日が見られるため「夕日の里」と呼ばれている。住民により「夕日の里づくり推進会議」を立ち上げ、農家民泊などのツーリズムを促進してきた。また、日本初の中等教育学校である宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校があり、地域も一体となった教育方針を貫くなど人材育成においても熱心な地域である。

五ヶ瀬町では、源流資源を守るためには上下流で暮らす人が源流の恵を共有し、協働して保全していく取り組みが重要と認識している。これまで町内では、地区毎に様々な地域づくりを展開するものの時の経過とともに活動が衰退してきた。この中で、「夕日の里」地区は、後継者育成に力を入れてきた甲斐があって、コミュニティビジネスや環境配慮型ビジネスが定着傾向にある。地元で活動しているＮＰＯ五ヶ瀬自然学校では、自然教室等による意識の向上は図ってきたものの経済的な側面まで踏み込まないと持続性は困難なため､着型観光モデルの構築を模索中である｡関係者揃っての共通認識は､個々に活動しても五ヶ瀬の力にならないため､何らかの展開で横串に繋いでいきたい、という思いを持っている。

## ２．五ヶ瀬川流域の概況

五ヶ瀬町から発する五ヶ瀬川は、一度、熊本県内を抜けた後、高千穂峡を形づくり、延岡市内で日向灘に注ぐ延長約 103km の河川である。延岡市の 300 年の伝統を誇る「鮎梁」は秋の風物詩として有名であり、昔から築場による鮎漁が盛んで、「全国水の郷百選」にも指定されている。

五ヶ瀬川を取り巻く山地はかって薪炭材の産出地だったのでその搬出のため、筏流しや船運が盛んな地域でした。現在では川で見かけられるのは、鮎漁に使う川船が主ですが、近年、子ども達を川に近づけるための「リバーフェスタ」というイベントも盛んになっている。

五ヶ瀬川流域図
（国土交通省の資料より）

# 第３章　新たな活性化のための「学びのツーリズム」の企画

## １.「学びのツーリズム」の企画づくり

近年、観光スタイルは、物見遊山から「体験・学び」へと進化している。また、旅のスタイルもツアーの参加による送客型観光から現地に行ってからコンテンツを選択する「着型観光」へと移りつつある。五ヶ瀬町は地質学的・生態学的には全国的にも非常に貴重なところであり、隣接する高千穂町は天孫降臨の地として日本の歴史上重要な地域である。このような五ヶ瀬川流域の「歴史と環境」への関心をコンテンツとして、知的好奇心の高いマーケットに働きかけていくことが有効と考えた。

五ヶ瀬町内では、以前より都市との交流による活性化の取り組みに熱心だった。冷涼な環境を活かした農産物も多く、それらによる都市農山村の交流や農家民泊による交流人口の拡大に努めてきた。特に農家民宿で都市部の若者を受け入れたり、充実した町営スポーツ施設を用いてスポーツ合宿を受け入れたりする実績を持っている。さらに、自然環境を活かした自然学校もＮＰＯによって運営されている。これらの実績から、五ヶ瀬町が持つ“地域の教育力”を活かして「学び」をテーマに豊かな自然と歴史を活かしたツーリズムを形成することで、九州各地からの来訪者を増大させ地域を活性化させていくことができるのではないかと考えた。

コンテンツは、地質・自然・有機農業・スポーツ・健康（五ヶ瀬町）・天孫降臨（高千穂町）・平家落人伝説（椎葉村）などがある。五ヶ瀬川の源流域は、熊本や博多方面からも近く、これらの地域住民が実質的な観光のマーケットである。さらに、歴史的なポテンシャルは全国区である。これまで五ヶ瀬町を巡り取り組まれてきた観光的側面の活性化の経験を再構築し、「学びのツーリズム」の誘発を目論みた。

## ２.「学びのツーリズム」の具体化

学びのツーリズムを具体化するには、関係者の協力や仕組みづくりが必要である。何よりも五ヶ瀬周辺の歴史と環境というコンテンツを全国の中から相対的に浮き上がらせるには、それぞれの分野のプロの力が必要である。地域内には、これまでにも地域資源を活かした観光に取り組んできた事業者がいる。一方、より質の高い取り組みとするためには、新たに観光系の取り組みを支援している専門家との連携が必要となる。また、五ヶ瀬以外で歴史や環境を売りにした観光を促進している地域との関連づけにより、消費者から見て選択の魅力を高めるこ

とも必要である。このため、このような商品開発を行っている旅行代理店とのタイアップも必要である。

この具体化に当たっては、２つの段階を経ることとした。最初は、五ヶ瀬町住民が、地域づくりを研究している大学ゼミの学生の協力を得て「学び」をテーマとしたツーリズムの考え方を実践的に整理し、実際のプログラムの進め方を模索する。その経験を踏まえ、次の段階で一般の人々を対象とした「学びのツーリズム」のプログラムを構築していくこととした。

平成 20 年度　学生の力を借りて、「学びのツーリズム」構築の企画提案の試行

これまで五ヶ瀬町に関わりのある大学研究室の力を借りて、学生たちと共に学びのツーリズムのための企画提案の機会を創出した。学生たちは、単に五ヶ瀬の自然や歴史、暮らしを学ぶだけではなく、学生の知識や経験を生かして、これからの五ヶ瀬を元気にするための企画を提案した。

平成 21 年度　学びのツーリズムを推進する仕組みを構築する

平成 20 年度の試行を踏まえ、「学びのツーリズム」の仕組みを構築するための課題の抽出と改善プログラムの試行、さらに専門家等の意見も踏まえつつ五ヶ瀬町の受け入れ態勢をつくりながら、仕組みを構築する。

平成 22 年度以降　学びのツーリズムを展開する

学生の協力を得た企画運営を推進することにより、地域資源を活かしたプログラムづくりや運営のための組織づくりなどを行っていく。これらの準備期間の後、より広く一般の人々をターゲットとした学びのツーリズムを企画していく。

## ３．学びのツーリズムのための学生たちによる企画提案の場づくり

学びのツーリズムのための学生企画提案の試行には、これまで五ヶ瀬町の地域づくりを支援してきた宮崎大学の根岸研究室、長崎県立大学の西村研究室の協力を得ることになりました。2008 年の春から夏にかけて、各研究室と五ヶ瀬町住民、五ヶ瀬町役場の間で企画提案の場づくりとして、次頁のような合宿の機会を設けることとした。

カリキュラムづくりにあたっては、以下のような点を大切にした。

○ 五ヶ瀬町内の各集落が取り組んできた地域づくりや環境保全などの取り組みが活かされること

○ これまで必ずしも地域づくりに関わりのなかった町民も、何らかの機会で関与するこ

とにより、今後の地域づくりの担い手としてのきっかけを得ること
○ 各集落の取り組みが、個別に展開されるのではなく、五ヶ瀬町が一体となった活動へと結びつけられること
○ 一過性のイベントではなく、学生からの提案を住民が受け止め、その後の地域づくりに活かしたり、新たな活性化のきっかけとすること

## ４．学びのツーリズムのための学生による企画提案の合宿の試行

平成 20 年 9 月 11 日から 13 日にかけて、学びのツーリズムのための学生による企画提案の合宿を試行しました。参加した学生数は、宮崎大学 21 名、長崎県立大学５名となった。

①オリエンテーション
五ヶ瀬町に集まった宮崎大学と長崎県立大学の学生に、五ヶ瀬町住民が地域紹介とカリキュラムの説明を行った。

②各家庭への分散（農家民泊）
学生たちが３日間お世話になる農家と引き合わせ後、学生は数名ずつのグループで各家庭に分散した。

それぞれの農家では、農家民泊ならではの交流の他、学びツーリズムとして、農家の暮らしの体験や農家ヒアリングなどを行った。

③地域情報の収集と分析
学びのテーマは、「五ヶ瀬町の暮らし」「五ヶ瀬町の歴史」「五ヶ瀬町のなりわい」です。学生は、グループごとに地元住民を訪問し、地域情報の収集を行った。

④聞き取り結果の分析
フィールドワークの結果は、各グループで取りまとめた。そして、五ヶ瀬町の学びツーリズムを推進する上で、何が問題なのか、どのようなアイディアがあるのかを学生が話し合った。

⑤全体交流会
２つの大学と五ヶ瀬町民による交流会を開催した。

⑥「学びツーリズム」のアイディアの議論

これまでのカリキュラムを経て、学生たちは、今後の五ヶ瀬を元気にするためには、自分たちがどのような「学びツーリズム」のアイディアを提案できるかを考えた。議論には、五ヶ瀬町役場のスタッフも入り込み、これまでの経験等を紹介しながら、学生のアイディアの実現性を高める支援を行った。

⑦学生から住民への報告会

最終日には、今回のプロジェクトでお世話になった五ヶ瀬町の住民を招き、学生から住民への報告会を行った。報告内容は、住民への聞き取りから感じた課題について、学生として、今後どのようにしていくべきかを提案した。

この場で出された学生からの提案は、それぞれの大学に持ち帰って、さらに具体化の構想を練ると共に、五ヶ瀬町役場が学生と住民の間をつないで、学生の提案の実現化を図ることとなった。

## ５．「学びのツーリズム」のアイディアの実践

学生たちから提案された学びのツーリズムのアイディアを、その後、五ヶ瀬町民と学生が共同で事業実施するに至った。

具体的には、以下のような展開が図られた。

①夜神楽体験ツアー
②五ヶ瀬特産品の都市部販売
③赤谷渓谷ライトアップイベント
④スキーツアー

## ６．平成 20 年度までの取り組みからの課題

五ヶ瀬町では、これまでにもさまざまな地域づくりを行ってきた。そのような中で、今回の取り組みは、地域内だけでなく外部の人材と共に、新しいツーリズムの可能性を模索した。取り組んだ結果、五ヶ瀬町の住民や行政も、今後の継続に向けた手応えを感じることができた。平成 20 年９月のプロジェクトを行う以前から、年度を越えた活動の発展の可能性を志向していたものの、やはり実際に実施した感触によって、その後の展

開は左右される。平成 20 年度の取り組みによって、学生が住民と共に築き上げていくことの重要性を認識することが出来た。また、若者たちのアイディアが、マンネリ化しがちな山の住民意識に変化をもたらすことにもつながった。今回のプロジェクトによってもたらされた成果としては下記のような点があげられる。

①「九州中央地域づくり研究所（仮称)」の発足

五ヶ瀬町住民が学生と共に活動を行った結果、単に経済的活性化にとどまらず、参加した住民の中に新たな地域づくりを盛り上げようとする機運が醸成された。そして、学びのツーリズムを推進するためには、五ヶ瀬町に推進組織が必要との認識に至り、五ヶ瀬町役場が中心となって「九州中央地域づくり研究所（仮称)」を発足させていくことを議論し始めた。平成 21 年度には、研究所が中心となって学びのツーリズムの具体化に向けた体制の整備やプログラムの構築を図っていくこととした。

第１段階　学生の力を借りて、試みを行う（平成 20 年度）

第２段階　学びのツーリズムを推進する仕組みを構築する（平成 21 年度）

第３段階　幅広いターゲットに学びのツーリズムを展開する（平成 22 年度）

②新たな人材育成の場の創出

地域づくりを研究する大学ゼミは九州の様々な大学にある。しかし、これまで、これらの学生たちが大学を越えて一堂に会し、フィールドワークを行いながら学びを深める機会はなかった。平成 20 年度の試行によって、学生たちは、他大学との繋がりができただけでなく、異なるゼミの研究分野の視点で地域づくりを学ぶ機会となった。また、学生たちが地域住民と共に行った試行の結果は関係者の口コミで他の大学にも広がり、平成 21 年度の参加要望が集まりつつある。このため、平成 21 年度以降にも継続発展できる仕組みづくりを検討してく必要がある。

③企業等のＣＳＲの促進

五ヶ瀬町が学生たちの人材育成を推進したことについて、さまざまな機会に活動報告を行ったところ、地元だけでなく九州管内の企業や経済団体等の関心を喚起することにつながった。そして、今後、学びのツーリズムの推進に当たって、これらの企業や経済団体から支援の申し出を受けることが出来た。

これまで、地域活性化は、地元住民と行政の努力で推進してきたが、九州全体をマーケットに活性化を考えるには、より広いネットワークづくりやプロフェッショナルな人材の協力が欠かせない。今回、大学の協力を得て取り組んだことが、企業や経済団体から注目され、次の拡大発展の手がかりにつなげることが出来た。

# 第４章　学びのツーリズムの推進

## １.「学びのツーリズム」の自立化と持続化に向けた課題

平成 20 年度までの試行を踏まえ、平成 21 年度は、学びのツーリズムが自立的・持続的な仕組みとなるための検討を深めることとした。その取り組みに当たっては、以下のように課題を整理した。

### ■山人の地域経営センスを磨くことが必要

これまでにも五ヶ瀬町周辺地域では、豊かな自然や歴史文化資源を活かした様々な地域活性化の取り組みを行ってきたが、どうしても「作れるもの」が「売りたいもの」となっており、すなわち「売れるもの」ではない。経済的活性化において、専門家や都会の若者とのコミュニケーションを通じて、山の人々もマーケット開拓やプロモーション活動の意識を改革する必要がある。

### ■九州を視野に活躍できる人材育成の場が必要

今後、九州の活力創出を図るには、広域的視点に立てる人材育成を行う必要がある。また、大学生は、昨今の厳しい経済状況の中で、より高いスキルを身につけることが就職活動において重要となっている。高いスキルは、「大学内」で学ぶだけでなく「地域」から学ぶことも重要だが、それは「大学近隣」に留まり、「九州」という視野の活動に参加する機会は少ない。五ヶ瀬町周辺地域は、九州の中央に位置し、九州全域の大学においても参加しやすい環境にある。

### ■山の活力を再生するには、若者の力と、その力を継続的に取り込む場が必要

九州の中央に位置する五ヶ瀬町周辺地域は、御多分に漏れず過疎化高齢化している中で、地域資源を活かした活性化を行うには、地域の人材育成と同時に、外部からの人材獲得によって、短期的・中長期的な人材育成戦略を構築する必要がある。

■人材育成を社会的な仕組みとするには、資金確保や専門家の力が必要

平成 20 年度には、２つの大学ゼミの協力のもとで、住民と学生が共に学びあう合宿を「まずはやってみた」。参加した大学生や受け入れた住民からの評判は大変良かったものの、より発展させるには、社会的な仕組みとする必要性と非営利型事業の資金確保、専門家の力などが必要となっている。

## ２．自立的・持続的な「学びのツーリズム」の構築

平成 20 年度までの試行を踏まえ、平成 21 年度は、学びのツーリズムが自立的・持続的な仕組みとなるための検討を深めることとした。その取り組みに当たっては、以下のような目的を整理した。

地域住民が守り育んだ地域資源を、若者の社会的起業力によって新たな可能性を拓く

九州中央に位置する五ヶ瀬町で、山人たちによる九州の次世代を担う人材を育成する「学び」の場を創造する。

都会育ちの若者たち（大学生）が九州の次世代を担う上で、幅広い視野と豊かな感性を育むことが肝要である。一方、山人も常に自らを切磋琢磨し山の暮らしを活性化していかなければならない。山の暮らしには、長い歴史によって培われた文化・技術や代々守り続けてきた豊かな自然資源がある。一方、過疎化・高齢化に象徴される福祉やコミュニティの課題も抱えている。そこで、山人と大学生が共に山の地域資源を活かす社会的起業を考え、挑戦する仕組みを構築することを目指す。ここには、都市部の企業・経済団体、そして主だった行政機関なども社会貢献（CSR）として関与する仕組みとしていく。この場で生まれたアイディアを、山人が地域づくりに活かしていく。この積み重ねによって、山の暮らしも元気再生に繋げていく。

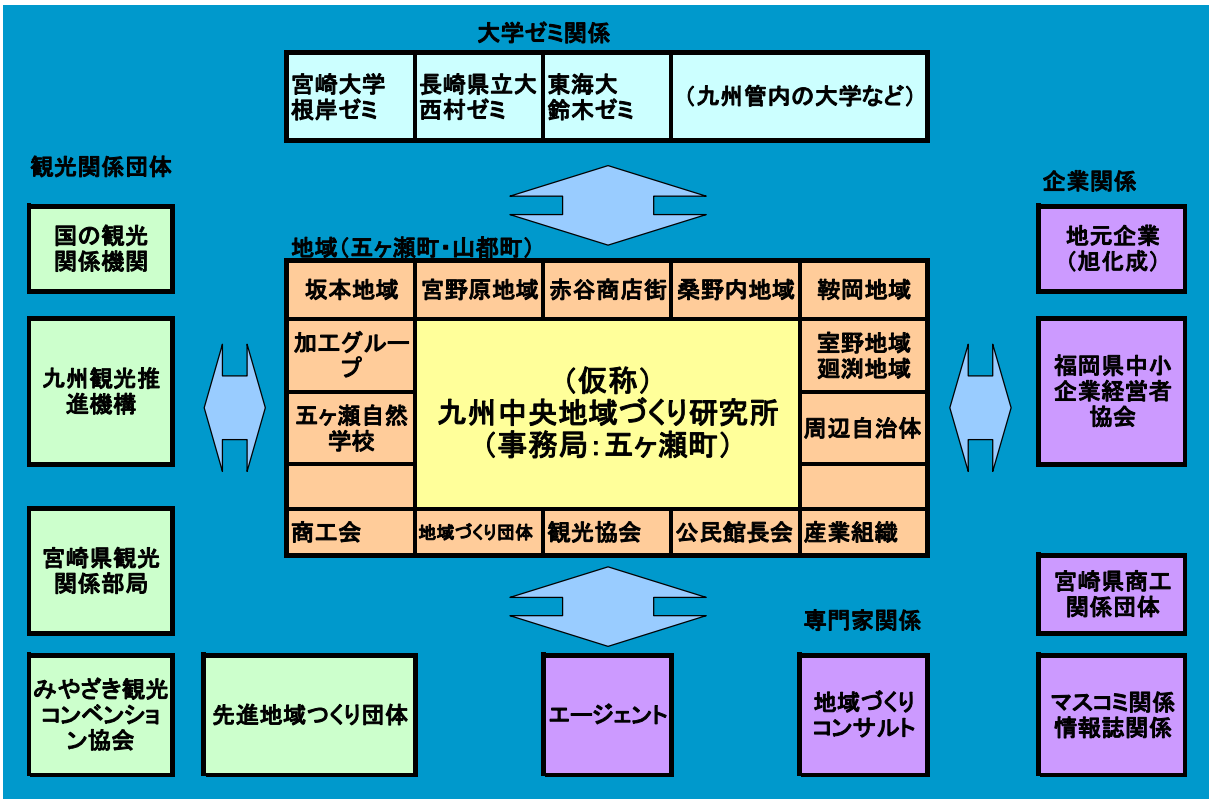
この場を経験した若者（大学生）たちが、何かをつかみ取り、九州各地の現場で社会意識の高い人材として活躍することが五ヶ瀬に生きる者としての願いである。

## ３．活動体制

これまでの試行により、五ヶ瀬町内の各地区を始め、町外のネットワークも徐々に結びつきを強めるところとなっている。

この繋がりをもとに、「(仮称)九州中央地域づくり研究所」を発足させた。

研究所は、五ヶ瀬町役場を事務局として、五ヶ瀬町民、大学、企業等の連携による水源地域の地域づくりを推進するためのプラットフォームである。



九州中央地域づくり研究所　　規約

（名　称）
第１条 本組織は、「九州中央地域づくり研究所」と称する。

（目　的）
第２条 本研究所は、九州中央地域の地域づくりを促進するため、住民、民間企業や大学・研究機関、有識者、行政等が結集し、より良い地域づくりの実現に必要な技術の研究開発に関して、その方向性や方策の検討、情報交流や普及啓発等を行い、もって地域の持続的な発展に資することを目的とする。

（事　業）
第３条 本研究所は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。
①地域づくりに関わる学生の合同合宿(学生リーグ)の実施に関する調査及び研究
②地域戦略パートナーシップの構築に関する情報交流
③社会起業アイディアの試行
④その他本研究所の目的を達成するために必要な事業

（会　員）
第４条 本研究所は、本研究所の目的に賛同し、入会の承認を受けた個人及び団体である会員をもって組織する。

- 五ヶ瀬町役場
- 五ヶ瀬町住民（九州中央地域づくり研究所の研究員として）
- 山都町住民（九州中央地域づくり研究所の研究員として）
- 旭化成株式会社（企業 CSR として）
- 福岡県中小企業経営者協会
- 宮崎県商工関係団体
- 株式会社ＪＴＢ（観光系の専門家として）
- パシフィックコンサルタンツ株式会社（地域づくりの専門家として）
- 宮崎大学　根岸裕孝准教授およびゼミ生
- 長崎県立大学　西村千尋教授およびゼミ生
- 九州東海大学　鈴木康夫教授およびゼミ生

（役　員）
第５条 本研究所に、次の役員を置く。
一 代　表（１名）
二 副代表（若干名）
２ 代表は、本研究所を代表し、会務を総理する。
３ 副代表は、代表を補佐し、代表に事故のあるとき、又は代表が欠けたときは、その職務を代行する。

（総　会）
第６条 総会は、会員をもって構成する。
２ 総会は、定期総会を年１回開催するほか、代表が必要と認めたときに開催する。
３ 総会は、総会員の２分の１以上の出席をもって成立する。
４ 総会は、代表が主宰し、議長を務める。
５ 総会の議事は、出席した会員の過半数をもって決するものとする。ただし、可否同数のときは、議長の決するところによる。
６ 総会は、本研究所の設立及び解散を議決するほか、次の事項を議決する。
① 規約の制定及び改正
② 役員の選任
③ 基本運営方針の決定
④ その他本研究所の運営に関して重要な事項の決定
７ 総会は、必要に応じて、書面又は電子メールによる開催とすることができる。また、やむを得ない理由のため総会に出席できない会員は、他の出席会員を代理人として表決を委任することができる。このばあい、表決の委任者は、会議に出席したものとみなす。

（事務局）
第７条 本研究所は、代表の総理の下、本研究所の会務を処理するため、事務局を置く。
２ 事務局は、宮崎県五ヶ瀬町役場内に置く。
第８条 この規約に定めるもののほか本研究所の運営上必要な事項は、代表が別に定めるものとする。

附　則

## ４．活動に関わった人々

平成 21 年度の段階で関わった人々は、以下のような状況となっている。

①五ヶ瀬町関係

- 五ヶ瀬町住民（地区ごとの単位で展開　次次頁表に整理）
- 五ヶ瀬町役場（地域振興課を中心に活動）

②参画している大学

- 宮崎大学　根岸准教授およびゼミ生
- 長崎県立大学　西村教授およびゼミ生
- 東海大学熊本キャンパス　鈴木教授およびゼミ生

宮崎大学　根岸准教授

学生リーグは県境を越えた取り組みとなっている。これは、五ヶ瀬町の地理的特性もあるものの、それ以上に飯干町長以下、五ヶ瀬町民の熱意と努力によって形成されてきたものである。

平成 20 年度にはじめて学生リーグを試行した。それまでは、宮崎大学、長崎県立大学がそれぞれに五ヶ瀬町に訪れて研究活動を行い、地元住民と交流を行ってきた。一方、五ヶ瀬町からは、飯干町長が個人の立場で各大学を訪れてお話の機会を持つなどの努力を行ってきた。その積み重ねの延長で、平成 20 年度に宮崎大学の根岸ゼミと長崎県立大学の西村ゼミの協力を得て、学生リーグの試行を行うことができた。その成果は、教員の口コミや五ヶ瀬町職員が各地の行政機関などへの出張の際に PR を行うなどの活動を経て、九州管内だけでなく関西方面の大学にまで話題が広がった。その結果、新たに東海大学の鈴木ゼミが関心を持ち、五ヶ瀬町と野調整を経て参加することとなり、平成 21 年度は、3 大学の参加による学生リーグとなった。

長崎県立大学　西村教授

東海大学　鈴木教授

③外部からの支援

人材を育成していくことは、時間も手間も掛かることである。しかし、これらの人材が地域を支え、次に繋がっていく。学生リーグの願いと平成 20 年度の活動の様子は、DVD に編集するなどして、企業や様々な公益的組織などに情報提供を行った。これらの組織からは、一つの町が、九州全体を視野に人材育成を図ることに共感し、その協力を申し出て頂いた。平成 21 年度のカリキュラムでは、このような団体から学生向けの講義を行う時間も確保することができた。

- 阿蘇地域振興デザインセンター（地域づくりの専門家として）
- NPO 法人教育オンブズマン（人材育成の専門家として）
- 九州観光推進機構（観光系の専門家として）
- 株式会社ＪＴＢ九州（観光系の専門家として）
- じゃらんリサーチセンター（観光情報の専門家として）
- 旭化成株式会社（企業 CSR として）
- パシフィックコンサルタンツ株式会社（地域づくりの専門家として）
- 福岡県中小企業経営者協会
- 宮崎県商工会議所

五ヶ瀬町住民は、平成 18 年度に地域づくり総務大臣賞を受賞した「夕日の里づくり推進会議」のように、集落レベルの地域づくりに熱心な地域である。五ヶ瀬町の地域づくりの取り組みは、以下のようなものがある。

表　五ヶ瀬町の各地区の取り組み

| 組織 | 地域 | 活動内容 |
|---|---|---|
| 夕日の里づくり推進会議 | 桑野内 | 農村の資源を活用し、都市との交流をとおして農村の環境整備を進める |
| 荒踊り保存会 | １区 | 国指定重要無形民族文化財「荒踊」を通じて地域づくりを進める |
| 椎茸・畜産農家 | １区 | 五ケ瀬の基幹作物のリーダー的生産者として活躍<br>椎茸振興会会長。品評会入賞多数 |
| ＳＡＰ | １区 | 新品目の導入による花舟栽培専業農家の後継者<br>SAP 会員としても農業後継者と情報交換活動を展開 |
| 林業（林研） | １区 | 林業研究グループ会長であり、林業を専業として経営<br>森林の持つ多面的機能や森林保全活動 |
| 宮の原暖地営農むらづくり推進協議会 | ２区 | 地域の特色を活かし、魅力ある農村社会の実現に向け、消費者（都市）との交流による村づくり活動展開 |
| 若桜会 | ２区 | 地域の伝統の継承と世代間の交流を深める活動 |
| 赤谷商店街 | ３区 | 商店街の活性化と住民との触れあい活動を展開<br>まごころ宅配事業。農業青年との異業種交流 |
| 五ヶ瀬商工会長<br>（お茶生産者） | ３区 | 「商工会、商店街の活性化は都市との交流、地域づくりから」を実践して商工会事業の中で地域づくりや特産品の開発を進めている（新緑会） |
| 五ケ瀬太鼓保存会 | ５区 | 五ケ瀬太鼓保存と継承活動。<br>学びの森の生徒への指導を通じ青少年育成活動 |

| 組織 | 地域 | 活動内容 |
|---|---|---|
| バーバクラブ | ６区 | 地域の素材を活かした女性の加エグループ<br>郷土料理・特産品の開発や研究と、商品の販売活動 |
| 民泊部会 | ６区 | 農業を営みながら農家民泊を通じて体験交流活動<br>心のおもてなしを通して五ケ瀬町（田舎）の良さを紹介 |
| JA 青年部 | ６区 | 農業後継者と連携による広域農業活動<br>地域の農産物の生産・販売活動を展開 |
| 鞍岡まちづくり会議 | １１区 | 森林の紹介と地域の自然文化を紹介（インストラクター）<br>住民のつながりと子供たちとのふれあい活動 |
| １２区お宝保存会 | １２区 | 地域の資源を探し、地域住民で守る活動 |
| ＮＰＯ法人五ケ瀬自然学校 | １０区 | 五ケ瀬の自然・資源を活かした体験交流活動<br>子供からお年寄りまで参加できるイベントの展開 |
| 女性農業指導士 | １１区 | 農業の魅力の PR と地域に密着した活動<br>農山村の女性の能力の開発と地位向上への取り組み |
| 雪だるま共和国 | １４区 | 地域住民との連絡協調による地域の振興の開発<br>地域農業のあり方､森林環境の整備など保全活動を展開 |
| イチゴ農家 | １４区 | 高冷地を活かした新規品目への挑戦<br>（夏秋イチゴ、さくらんぼ） |
| 霧立越の歴史と自然を考える会 | １４区 | スキー場建設の発案者<br>やまめの養殖を日本で鼓初に始める<br>森林資源を生かした体験型の観光に取り組む |

## ５．学びのツーリズム 2009 の展開

平成 21 年度の取り組みは、以下のような流れとなった。

平成 19 年度、平成 20 年度の活動の蓄積

↓

ステップ１　五ヶ瀬町民たちによる準備会議の開催

↓

ステップ２　「学生リーグ 2009」の開催
- ■学生たちから五ヶ瀬町民への前年度の活動報告
- ■合同研修会
- ■グループ別フィールドワーク
- ■報告会（最終日に社会起業アイディアの提案）

↓

ステップ３　社会起業アイディアの試行
- ■例）学生スキーツアー
- ■例）地元商店街の活性化支援
- ■例）都市部の商店街での特産品販売　など

↓

ステップ４　活動の拡大に向けた課題分析
- ■平成 21 年度の取り組みの改善
- ■平成 22 年度以降も学生リーグを開催するための仕組みの構築

↓

ステップ５　「九州中央地域づくり研究所」の本格稼働（平成 22 年度）
- ■自律的な活動の展開

「学び」をテーマに、様々な人々の交流（ツーリズム）を誘発

## ６．学生リーグ 2009　カリキュラム

### １）カリキュラム

平成 21 年度のカリキュラムは、平成 21 年 9 月 7 日から 10 日までの 4 日間となった。
各大学の活動カリキュラムは以下のようになっている。
主な内容は、以下の項目である。

- ■ 前年度報告会　：　宮崎大学、長崎県立大学
- ■ 合同研修会　：　民間の 5 つの団体から講師を招いた研修
- ■ 交流会　：　３つの大学と五ヶ瀬町の関係者による交流
- ■ フィールドワーク　：　少人数のグループに分かれて町内で調査活動
- ■ フィールドワークのとりまとめ　：　調査結果を報告会に向けて整理
- ■ 報告会　：　五ヶ瀬町民への報告・意見交換

| | 9/7（月） | 9/8（火） | | 9/9（水） | | | 9/10(木) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 宮崎大学 | 宮崎大学 | 東海大学<br>長崎県立大学 | 宮崎大学 | 東海大学 | 長崎県立大学 | 全大学 |
| 午前 | | 1区地域資源調査<br>「荒踊の館」<br>（植木館長）<br>「恵良八幡」<br>「うげの滝」<br>「用水路頭首口」<br>「大石」<br>「寺」<br>「内の口」等 | ＜移動＞ | 1班（4人）＝1区の1<br>2班（4人）＝1区の2<br>3班（4人）＝1区の3<br>4班（4人）＝2区 | 1班（6人）＝鞍岡の1<br>2班（6人）＝鞍岡の2 | 赤谷商店街（7人） | ◆町民センター会場準備 |
| 午後 | 五ヶ瀬着 | 合同研修会<br>横山氏<br>小椋氏<br>木村氏<br>日下部氏<br>石松氏 | | 1班（4人）＝1区の1<br>2班（4人）＝1区の2<br>3班（4人）＝1区の3<br>4班（4人）＝2区 | 1班（6人）＝鞍岡の1<br>2班（6人）＝鞍岡の2 | 赤谷商店街<br>夜　赤谷商店街への報告会 | 報告会 |
| 夕方 | 農家民泊 | 交流会　18:00開会　農家民泊 | | 農家民泊 | | | |

## ２）前年度報告会

学生リーグのカリキュラムの冒頭には、前年度関わった宮崎大学と長崎県立大学の学生が前年度の活動報告会を行った。なお、当時の大学 4 年生は卒業しているため、報告は、前年度参加した当時の２・３年生によって行われた。

①宮崎大学

五ヶ瀬町役場及び五ヶ瀬町民を招いて、平成 20 年度の 1 年間の活動報告を行った。

報告では、前年度の学生リーグのふりかえりと、その後の様々な社会起業アイディアの試行について、その様子を報告した。

②長崎県立大学

長崎県立大学の西村ゼミは、五ヶ瀬町の赤谷商店街の活性化について継続的な調査活動を進めている。平成 20 年度は赤谷商店街の横を流れる五ヶ瀬川のライトアップなど、商店街では取り組んだことのないアイディアのイベントを行ってきた。このため、赤谷商店街の商店主を招いた報告会では、これまでの活動経過と赤谷商店街への今後の活動の提案を行った。

### ３）３大学参加の合同研修会

合同研修会では、5 人の講師を招いて、地域づくり、観光振興、人材育成の講義を受講した。

九州観光推進機構　横山氏

- 九州が一体となって九州観光を振興するために組織化された。
- 各種統計データを用いて、現在の九州観光の実態と課題を紹介した。

JTB 九州　小椋氏

- 九州へは中国からの旅行者が急増している。ほかにシンガポール、香港、タイなどがあり、韓国は意外と少ない。
- 最近は、お客様誘致に通じた地域活性化がテーマとなっている。

NPO 法人教育オンブズマン　日下部氏

- 今日の歴史・道徳教育に於いて「先人の卓越した業績を語る」という姿勢が無いので、それを補う活動を行っている。
- 二宮尊徳の報徳思想について話を行った。報徳思想とは、経済と道徳の融和を訴え、私利私欲に走るのではなく社会に貢献すれば、いずれ自らに還元されると説く。

阿蘇地域振興デザインセンター　石松氏

- 阿蘇地域振興ザインセンターは、阿蘇地域内の連携を図り、地域振興、観光振興、環境・景観保全、情報発信を広域で取り組むためのシンクタンクである。
- 実際の活動について紹介を行った。

じゃらんリサーチセンター木村氏

- 「観光会議きゅうしゅう」を刊行している。
- じゃらんリサーチセンターの活動紹介。
- 旅行の満足度調査の概要、旅行のバリエーション、集客度アップなどについて講義。

宮崎日日新聞報道より（平成 21 年 9 月 9 日）

第3種郵便物認可　　宮

# 学生「五ケ瀬」を学ぶ

## 宮崎大など3大学30人　地域や観光 合宿ゼミ

大学生が五ケ瀬町の地域づくりを学ぶ合宿ゼミ「九州ハイランド大学リーグ」が8日、町内で始まった。宮崎、長崎県立、東海大（熊本県）から30人（指導者を含む）が参加。

10日までの3日間、セミナーやフィールドワーク（現地調査）を通して、山間部の地域資源を生かした取り組みや社会的起業について考える。

九州の次世代を担う人材育成と地域活性化が狙い。九州内の大学ゼミと連携して地域づくりに取り組んでいる町が、昨年から実施している。

初日は三ケ所の森林交流館でセミナーを開催した。九州内で活躍する観光の専門家や企業関係者5人がそれぞれ45分講義。統計分析や観光戦略、地域活性化への取り組み、また自らの体験談などを話し、学生たちはメモを取るなどして真剣に耳を傾けていた。

2日目は、宮崎大が三ケ所地区、長崎県立大が赤谷商店街、東海大は破岡地区に繰り出し、地域住民への聞き取り調査などを実施。最終日は午前中に報告書をまとめ、午後に地域活性化へ具体的な提言を行う報告会を開く。

専門家の講義に耳を傾ける3大学の学生たち

宮崎大教育文化学部3年の「元山恵利さん（21）は「町長のあいさつにもあったように、五ケ瀬の原理原則の中から五ケ瀬を見つけ出したい。他大学との交流も楽しみで、実りある3日間にしたい」と話していた。

## ４）フィールドワーク

3 大学が、それぞれ数人のチームを作り、五ヶ瀬町内全域でフィールドワークを展開した。（平成 20 年度は、試行のため夕日の里地区と赤谷地区に限られていた。）

各地区で対応した五ヶ瀬町住民は、各地区の区長をはじめ、地場産業の経営者、五ヶ瀬町で活躍する若者、寺社関係者、教育関係者など、多岐にわたった。

地域産業を学ぶ

地元の歴史などを学ぶ

五ヶ瀬町の若者との意見交換

農家さんからの聞き取り

赤谷商店街の聞き取り

### ５）フィールドワークのとりまとめ

各グループがフィールドワークで得た情報を、報告会に向けて整理する。これまで大学の講義やゼミで受けてきた指導などを踏まえ、学生が自ら見聞きしたことを、住民達に提案していく作業である。

グループごとに場所もテーマも異なるため、とりまとめに当たっては、教官からのアドバイスをもらったり、他のグループのとりまとめの様子を伺ったりしながら手探りの作業となっている。

## ６）五ヶ瀬町民対象に「報告会」

各グループでフィールドワークを行った結果は、最終日の報告会までに取りまとめ、五ヶ瀬町民へのプレゼンテーションを行った。個々人の個性がよく表れたプレゼンテーションとなった。

また、質疑応答を通じて、学生からの提案事項を町民との間で理解を深めていった。

《宮崎大学》

### ①1 区（１班）の発表

１班の考える１区の問題点として、まとまりがない・過疎化が進んでいる・地域の構造に興味がない・資源の価値認識がないなどが挙げられ、結果として地域の衰退が進んでいると考えた。

そこで、この問題を解決するプロジェクト案として、『農業体験＋交流会』が挙げられ、内容としては地元農家でのこどもと女性と外部女性を取り入れた農業体験、採れた野菜を用いた郷土料理の紹介、外部を含んだ交流会といったもので、後継者不足解消、伝統の再認識、外部からの意見、客観的な評価による地域の変革などの効果を目的としている。

世代間交流・土地資源の再認識が地域内住民の意識変革を生み出し、加えて外部への情報発信につながる。

キーワード→自然と人と人

・発表に対する意見

地元の松永さん「若い者と年配者が意思疎通をはかり、自分たちのもっているすばらしいものをもっと活かして頑張っていきたい」

### ②1 区（２班）の発表

２班のヒアリングの結果として、１区は地元愛が強いという結果が得られた一方で、問題点として、地域のために活動する団体の歩調が合っていない、まとまりがなくなってきている、現状維持志向が強いという結果も得られた。

そこで解決策として外部との交流をもっと行うことで、自分たちのよさ気づき自信が付く、また子どもからお年寄りまで共通の話題ができる。また、情報の共有・危機感の共有・素晴らしさや宝の共有を行うことで、住民に一体感が生まれ、活性化につながるのではないかとまとめている。

キーワード→住民の住民による住民のためのまちづくり

### ③1 区（３班）の発表

３班の考える１区の問題点として、過疎化が進んでいる・働く場所がない・若い人がいない・外の人を受け入れる設備が整っていない・リーダーシップをとる人がいないということが挙げられた。そこで、２班は小学校からはじまるまちづくりとして、「坂本づくり出張講座」を行うことでこの問題を解決する。

内容としては、教育振興会を中心に域内の坂本づくりに携わっている人や外部の人が坂本づくりの橋渡しを行い、効果としてはまちづくりのネットワークの形成、域内住民の坂本づくりへの意識関心の向上、地域づくりを通して、さらにぬくもりのある坂本ができるなどといったものがあげられる。

坂本づくり出張講座の開催→ひとりひとりが主役の五ヶ瀬の町に→みんなが帰りたくなる坂本の町へ

### ④２区（４班）の発表

４班のヒアリングの結果として、自然がたくさん、縦の関係のための地域づくり、伝統が継承されている、地域の人のつながりが深い、人と接することを重視しているなどの結果が得られた。

問題点として、地域の活動に満足している人と満足していない人がいることが挙げられ、問題解決案として『みんなで作ろう　わくわく２区マップ』が挙げられ、効果としては地元に満足している人は活性化のための道をひろげることや、地元に満足していない人は地元を見直す機会を作ることなどである。

◎宮崎大学のまとめ

宮崎大学は、主に１区(坂本地区)と２区(宮の原地区)でヒアリングを行い、その結果として、地元愛が強いことや伝統が継承されていることなどの良い点をあげた上で、まとまりがないことや過疎化が進んでいること、若者が少ないことや労働の機会が少ないという問題点が挙げられた。その問題を解決するための案として、『農業体験＋交流会』や「坂本づくり出張講座」が提案され、地区外との交流を通して伝統の再認識を行い、域内住民の地域づくりへの意識感心の向上を行い、住民に一体感が生まれるとした。

《長崎県立大学》

４年前から赤谷の活性化についてヒアリングを行っている。
健康の５要素（教養・休養・運動・栄養・環境）をもとに研究を行っている。
ヒアリングの結果、自然に囲まれた赤谷は今後子どもの声が聞こえるまちにするためにはとても良い場所といえ、地元が何もないなどの不満不平を言うことなく地元が好きだという気持ちが伝わってきたということがわかった。田舎だから苦労したではなく、九州の真ん中だから、どの場所に対しても距離が変わらないという逆転の発想がいいという結果が得られた。
赤谷商店街の地図を、５要素を元に作成している。

商店街に滞在する時間を延ばす工夫をする。
→木地屋から湧き水、石橋のそばを通って赤谷商店街に通じるウォーキングコースつくり。

**◎長崎県立大学のまとめ**

長崎県立大学は、４年前から赤谷地区の活性化についてヒアリングを行っており、今回の報告ではヒアリングを開始してからの歩みや前回報告をおこなってからの赤谷の進捗状況について報告があった。今年度の報告としては、健康の５要素（教養・休養・運動・栄養・環境）をもとに赤谷地区の地図作成を行い、赤谷をよりよい商店街にするためには健康の５要素がそろっているという結論にいたった。また、商店街に滞在する時間を延ばす工夫としてウォーキングコースつくりなどがあげられた。

**《東海大学》**

**①１班の発表**

スキー場利用に関する提案
・パンフレットに宿泊サービスを記載する
・民宿のサービスを充実させる
・夏場、スキー場をキャンプ場として利用する
・五ヶ瀬名物を売る店をスキー場につくる。

五ヶ瀬の自然の利用に関する提案
・家族連れをターゲットにしたレジャーを考える
・広報の仕方
・自然との共存と共栄
－白と緑と青の世界－

**②２班の発表**

滞在型のプラン・日帰りプランの提案
鞍岡に入る国道に看板
街灯などもリニューアル
語り手(学芸員・ガイド)などの要請
(語り手の案内のマニュアル本)
→五ヶ瀬の財産を守り、伝える

**◎東海大学のまとめ**

東海大学は鞍岡地区のヒアリングを行い、夏場の過ごしやすさを利用したスキー場に関する提案や、家族連れをターゲットにしたレジャーの提案、滞在型のプランや日帰りのプランの提案を行い、季節ごとの特性を生かしたリピーターの確保などを通してさらなる誘客につながるとした。

## ７．社会起業アイディアの試行

### １）宮崎市内の商店街でのプロモーション活動（宮崎大学）

宮崎大学の学生たちは、大学のある宮崎市内の商店街の活性化なども支援している。このような縁を活かして、宮崎と五ヶ瀬をつなぐプロジェクトを平成 20 年度からはじめている。第 2 回となる平成 21 年度の取り組みは、ゼミの先輩から後輩へとイベントを展開するためのノウハウを学びながら進められた。

また、昨年度参加した地域住民達も今回の取り組みを楽しみに待っており、宮崎と五ヶ瀬の住民同士の交流の場ともなった。

## ２）五ヶ瀬スキー場の利用実態調査（東海大学）

東海大学の学生たちは、主にスポーツ経営について学んでいる。このため、五ヶ瀬町の五ヶ瀬スキー場について、その経営状況を分析し、今後の発展に資することを目的として、現場でのアンケート活動を行った。

### ３）大学にて募集した学生たちによるスキーツアー（宮崎大学）

学生リーグに参加した学生が中心となり、宮崎大学の学生たちにスキーツアーを募集した。バス１台を仕立て、１泊２日のスキーツアーが敢行された。この事業では、五ヶ瀬町内の宿泊のほか、お土産品の購入など様々な経済効果に寄与した。

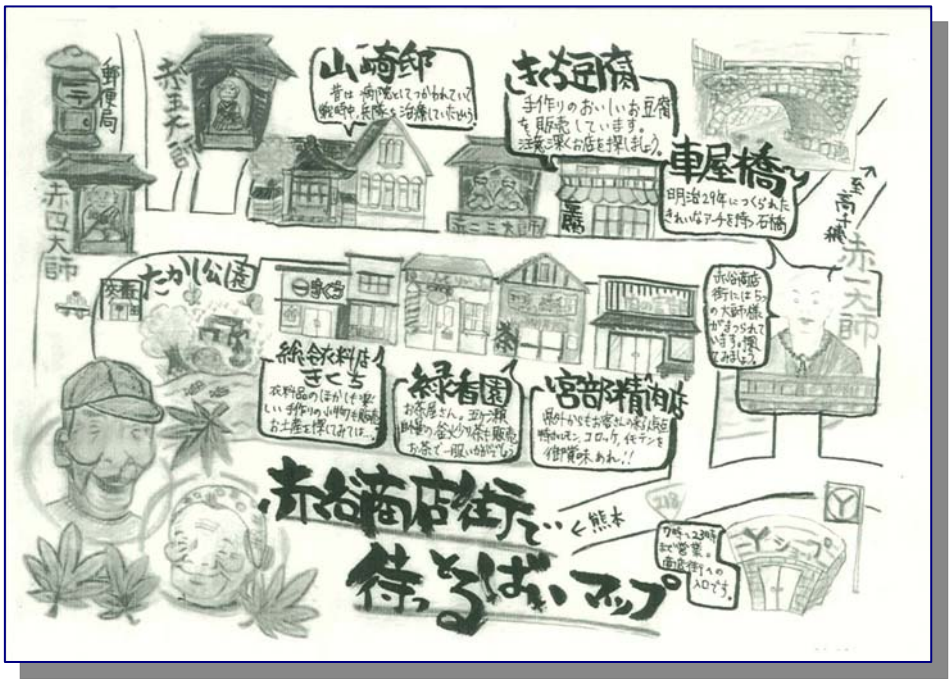
### ４）五ヶ瀬町商工会で開発した商品サンプルを学生たちがテスト・モニター（宮崎大学）

五ヶ瀬町商工会では、地域資源を活かした商品開発を進めている。学生に参加してもらい、これらの商品の評価を行った。

3 つの大学による社会起業アイディアの試行は、以下のようなものが進められている。

- 学生が企画した「スキーツアー」による若者の観光入込客数の増大（宮崎大学）（再掲）
- スキー場経営に関する研究活動（東海大学熊本キャンパスのスポーツ系学生）（再掲）
- 地域の祭への学生の協力により、地域の賑わい形成（各大学）（再掲）
- 地元商店会のプロモーションツール（地図等）の制作（長崎県立大学）

**学生が作成した地元商店街マップ**




- 教員から学生に課題が出され、五ヶ瀬町が研究活動の対象となる（各大学）
- 宮崎の駅前商店街に、五ヶ瀬町の特産品販売の場づくりの企画が進行

巻末「資料編」参照

# 第５章　今後の展開

## １．これまでの取り組みの効果

本事業のねらいは、上下流の流域活動に関心の高い住民等のみではなく流域活動に関心の高くない層の住民等も流域活動に参加し、上下流全体が一体となり水源地域の保全・活性化を促進するための仕組みづくりである。このような観点から、五ヶ瀬町を中心とした 3 カ年のプロジェクトは、必ずしも流域活動への関心濃霧にかかわらず、五ヶ瀬町が持つ地域の可能性を活かした地域づくりや、そのために必要な環境保全などに関する動きへと繋がりつつある。平成 22 年度の取り組みから、以下のような流れが見えてきた。

■ 学生たちがフィールドワークから見つけ出した地域の課題は、学生の言葉で住民に直接、問題提起し続けられている。

報告会は非常に充実した時間となっている。時として、学生たちの経験不足により、言葉足らずの表現も見受けられた。しかし、その一言、一言を真剣に伝えようとする姿勢に、五ヶ瀬町住民も真摯に受け止め、感動もしていた。

■ 宮崎大学・長崎県立大学・東海大学熊本キャンパスの教員及び学生が、研究活動として頻繁に五ヶ瀬町に訪れるようになり、各集落でのフィールド活動を継続している。

平成 20 年度は、宮崎大学、長崎県立大学を迎えてのプロジェクトも、平成 21 年度は熊本にある東海大学を迎えることができた。各教員とも地域に入り込んでフィールドワークを通じた学生の教育を大切にしている。このため、学生リーグの期間だけのお付き合いではなく、恒常的な研究活動として五ヶ瀬町に関わって頂いている。

■ 各地区の実態は、まだまだ課題が多いものの、学生たちとの交流を繰り返す中で、徐々に受け入れの中で意識の変化が生まれている。

■ 各集落（地区）の住民も、学生との交流により地域づくりに対する積極的な姿勢が醸成されつつある。

■ 各集落の住民との交流から一歩進み、協力しながら地域振興を促進する活動へと深

化しつつある。

五ヶ瀬町は、地区ごとのまとまりがよく、また地区ごとに地域づくりに取り組んでいる。平成 21 年度の学生リーグでは、五ヶ瀬町内全域の主な地区に学生が入り込んだ。そして、その後も地区単位での関わりを深めている。地元住民にとって、若者たちが地域に関わりを持つようになったことは、これまでの地域の活動に大きな力となって作用している。

■ 平成 20 年度は、まずやってみた。平成 21 年度は、継続の体制が見えてきた。平成 22 年度以降は、さらに、各集落の住民が、自らの役割を認識できるように活動を深めたい。

平成 21 年度末で調査を通じた支援は終了となる。今回の学びのツーリズムは、調査活動の中での議論から生まれ、調査活動を通じて試行し、そして、今後の発展への流れを構築したものである。引き続き、地域住民と大学との連携によりこの活動が持続し発展することが期待される。

## ２．今後の展開

今後の展開について、動きが見えつつあるものを掲載する。

■ 平成 22 年度も「学生リーグ」を五ヶ瀬町単独予算として確保し、継続発展の予定である。

これまでは本事業の調査予算を主に活動を進めてきた。今後は、五ヶ瀬町の予算により学生リーグを進めていく予定である。また、宮崎県なども関心を持っており、今後、九州全体からの支援を誘発するなどの取り組みを継続する。

■ ４月には、３大学の先生たちに集まってもらい、平成 22 年度の活動を整理する。

①「学生リーグ」開催のプログラム充実、参加ゼミ数の拡大
②継続実施に向けた体制の整備・コスト低減化
③「学びのツーリズム」の事業性の向上
④運営資金の確保に向けた関係機関との協議
⑤プロジェクトのプロモーションを通じた社会的認知の向上

■ 策定作業中の「第５次五ヶ瀬町総合計画」において、学生リーグを絡めていく。

■ 地域住民の協働を促進するためにも、次回の学生リーグでは、同じ日程で町民参加のシンポジウムを予定している。

現在、新たな五ヶ瀬町総合計画を策定中である。今後の地域づくりを推進する上で、外部からの力、特に若者たちとの関わりを五ヶ瀬チュ尾が活かすことが重要である。今回の流れを今後の地域づくりの中で活かしていくことが期待される。

■ 九州中央地域づくり研究所の本格稼働による活動の継続化

今後の五ヶ瀬町の地域づくりは、九州全体を視野に入れた取り組みとしていく必要がある。2 つの大学からはじまったプロジェクトは 3 大学となった。他の大学からも活動内容に関心を持ってもらい問い合わせを頂いている。

また、五ヶ瀬町は、地理的に九州の中央に位置し、宮崎県と熊本県の県境であること、また大分県県境にも近い。このような特性を生かして積極的に県境を越えた近隣自治体とも連携した地域づくりが推進できる。

その推進のためのプラットフォームとして「九州中央地域づくり研究所」を機能させていくことが期待される。

おわりに

下記の寄せ書きは、宮崎大学の学生たちのコーディネートによって、宮崎市内の商店街で五ヶ瀬町の特産品販売を行ったとき、五ヶ瀬町から持って行った「雪（源流の水）」で遊んだ幼児たちによるものである。周囲を取り巻く親や祖父母なども、温暖な宮崎の地で子どもたちが雪で遊ぶ様子を温かく見守っていた。

本事業は水源地域の活性化を目指すことから、そのために必要な社会関係資本（いわゆるソーシャルキャピタル）を構築することに主眼を置いて活動してきた。

ここで育まれた出会いが、引き続き発展し、子どもたちが大きくなったときに五ヶ瀬町の活性化に繋がることを期待するものである。

# 資　料　編

「いっちゃが宮崎楠並木朝市」出店報告書（宮崎大学）

鞍岡波帰調査チーム（東海大学）

モニタースキーツアー報告書（宮崎大学）

五ヶ瀬最終報告（宮崎大学）

平成 21 年度
水源地域活性化調査　報告書

平成 22 年 3 月

発行：国土交通省土地・水資源局 水資源部
水源地域対策課
東京都千代田区霞が関２－１－２

調査担当：パシフィックコンサルタンツ株式会社
情報事業本部　地域環境システム部
東京都多摩市関戸１－７－５